

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 7 月 4 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	川北 安奈

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
北海道目梨郡羅臼町
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
羅臼シャチ調査実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 6 月 29 日 ~ 平成 28 年 7 月 4 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
調査船「はまなす」斎野氏、浜松氏、杉田氏など
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
日程 6月29日 大阪国際空港から羽田空港経由で中標津空港へ移動。羅臼町までバスで移動。 6月30日から7月3日 調査船「はまなす」に乗船してシャチの調査。 7月4日 京都へ帰る。 今回の自主企画では北海道の羅臼町を訪れ、シャチの調査を行った。京都大学野生動物研究センターの山本友紀子氏が2010年ごろからシャチの調査に携わっているため、山本氏や斎野氏たちからシャチやその研究手法について教わった。私たちが乗船したのは、3頭のシャチにテレメトリー発信器が装着された2日後と、恵まれた状況であった。テレメトリーによってシャチの場所が容易にわかり、2日目は乗船後1時間でシャチに出会えた。しかし、初日はテレメトリーの情報が当てにならず、乗船後6時間弱はシャチを見つけられずにいた。船で調査する経験は私にとって今回が初めてであり、海棲の野生動物の調査がいかに難しいかを身をもって知ることができた。 調査では、船の動向を記録する「努力量調査」と観察されたシャチについて記録する「シャチ調査」が行われている。これらは共有データであり、一緒に乗船する他の研究者たちと協力して記録される。また、各自の研究のために水中マイクを用いた音声データなども取られる。シャチを見つけられるまでは、双眼鏡の中心を水平線に合わせて遠くの方を探す。船上は揺れが激しく、双眼鏡で長時間探すのは困難だった。 斎野氏のお話では、今年は幸運なことにたくさんのシャチが見られるということで、実際に乗船2日目には約40頭の群れが観察された。水中マイクを通さずともシャチの鳴き声を耳にすることができた。初日には、シャチより先に5~6頭のカマイルカに出会えた。 もし私がシャチの研究をすると想像すると、水中カメラで彼らの様子を捉えて行動観察したい。彼らの生活は水中にあって、船上から得られる情報は、呼吸時の様子や泳いでいるときの隊列、個体間距離や遊動域などと限られているからだ。採食の様子や他個体との社会的な行動を水中カメラで観察し、彼らの基本的な生活についてや、意思決定・コミュニケーションについて知りたいと思った。

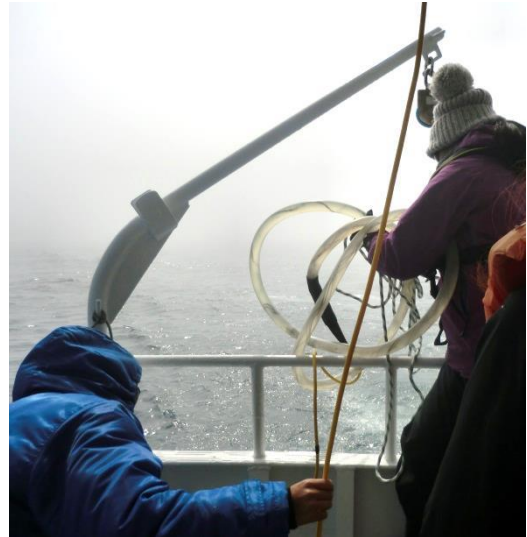
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



調査船「はまなす」(写真左)

水中マイクを準備する様子(写真右)



シャチ



カモメ

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS の支援を受けて行われました。

引率して下さった山本さま、調査船「はまなす」の斎野さま、浜松さま、杉野さま、高島屋旅館と民宿よね丸のみなさま、一緒に乗船させていただいた仙台コミュニケーションアート専門学校などのみなさま、本実習の準備をして下さった PWS 支援室のみなさまに感謝申し上げます。

特に斎野さまには、シャチだけでなくアフリカの野生動物についても広く教えていただきました。ありがとうございました。